

長岡京左京一条四坊七町跡 600 次  
発掘調査報告書

2018年12月

株式会社 地域文化財研究所



## 例　言

- 本書は、京都市伏見区久我石原町9・16 南区久世大蔵町560-1・32・33・615において、株式会社ブレーン・ストーミング社が計画された宅地造成に伴い、株式会社地域文化財研究所が同社より委託を受け実施した発掘調査の報告書である。（京都市番号：17NG500）
- 上記の調査は、宅地造成内道路部分の256 m<sup>2</sup>を対象として平成30年4月4日から5月2日まで現地調査を行った後、株式会社地域文化財研究所京都支所において整理作業を実施した。  
本遺跡の現地調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の検査・指導と、学識経験者として近畿大学文芸学部文化・歴史学科教授 綱伸也氏により調査指導をいただいた。
- 上記事業に関する発掘調査担当者は福永信雄、影山美智与、市田英介、田之上裕子、江崎周二郎である。  
本書の執筆は、福永の指示のもと、影山、市田、江崎が行った。編集は福永が行い、それぞれの執筆者名を目次及び各項の末尾に記した。

- 本書掲載の遺物整理作業は、阪田恭子、宮原温美、城愛希与、松田直子が行った。
  - 現地調査実施にあたっては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導を受けた。  
現地作業についてはやましろ文化財株式会社、測量については株式会社埋文アシストから協力を得た。  
報告書作成に際し、下記の方々にご指導、助言をいただいた。記して謝意を表します。
- 綱伸也、奥井智子、中島皆夫、中塚良、原秀樹、福家恭（敬称省略・順不同）
- 遺物実測図の背景は煤、■は黒斑を表す。
  - 本書作成にあたり、下記の文献を参考とした。

小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』  
京都編集工房

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社  
小林行雄・杉原莊介 1989 『弥生土器集成』 本編（合本） 東京堂出版  
寺沢薰・森岡秀人 1990 『弥生土器の様式と編年』 近畿編II 木耳社

伊藤潔・綱伸也 2011 「長岡京左京一条四坊・東土川遺跡」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）

京都市埋蔵文化財研究所

加納敬二・津々池惣一 2009 「長岡京左京二条四坊六・七町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2008-13 （財）京都市埋蔵文化財研究所

鈴木廣司 1994 「長岡京左京一条四坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所

津々池惣一 2014 「長岡京左京一条四坊五町跡・東土川遺跡(12NG311)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』京都市文化市民局

野島永・中川和也・小池寛・岩松保・平良泰久 2000 「長岡京左京二条三・四坊・東土川遺跡」『京都府遺跡発掘調査報告書』第28冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

長宗繁一 1994 「長岡京左京南一条四坊・東土川遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所

丸川義広 2006 「長岡京左京一条四坊十二町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書2006-16』（財）京都市埋蔵文化財研究所

## 目　次

I はじめ	1 (市田)
II 遺構	3 (市田)
III 遺物	13 (影山・市田・江崎)
IV まとめ	23 (福永)
図版	24 ~ 36

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

調査地は京都市伏見区久我石原町 9-16 南区久世大蔵町 560-1・32・33・615 に所在する。水田として利用されていたが、今回、宅地造成工事が実施されることになった。当該地は、長岡京左京一条四坊七町に位置し、近郊では、弥生時代中期、古代の遺物が出土した流路や、長岡京期と想定された掘立柱建物などが確認されている。また、調査区西端には東四坊坊間西小路の東側溝が想定されている。このため、宅地造成に先立ち京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査（17NG500）が行われた。その結果、ピットや縄袖陶器を含む土坑、溝と東西方向の柱穴列や一辺約 8~10m の方形周溝墓の可能性のある溝が確認された。これを受け、宅地造成内道路部分の 256 m<sup>2</sup>を対象として本発掘調査が指導されたことから、平成30年4月4日から5月2日まで開発者である株式会社ブレーン・ストーミング社から依頼を受けた株式会社地域文化財研究所が実施した。

## 2. 位置と環境

調査地は桂川右岸から 900m、標高 11.6m 前後の地点に位置する。この地域の地形は、桂川の氾濫により形成された沖積平野に分類される。また、京都盆地西部の丘陵から大小の川が桂川に向かって流れこみ扇状地を形成したことから、平坦な低地には後背湿地や低い微高地が複雑に点在する地形が形成されている。

調査地のある桂川右岸の長岡京北東城周辺では、縄文時代から人々の活動が認められる。縄文時代の周辺の遺跡は、調査地より北東域に中久世遺跡（中～晩期）、南西域には鶴冠井遺跡（後期）、鶴冠井清水遺跡（晩期）がある。弥生時代は北東域で中久世遺跡（中～後期）、大蔵遺跡（中～後期）、南西域で東土川遺跡（中～後期）、鶴冠井遺跡（前～後期）、鶴冠井清水遺跡（中～後期）

で集落が確認されている。古墳時代は北東域の官ノ脇遺跡（前期）、大蔵遺跡（前～中期）、中久世遺跡（後期）で堅穴住居が検出されている他、南西域の鶴冠井遺跡（前期）、東土川遺跡（中～後期）、鶴冠井清水遺跡（後期）やガラス勾玉の鉄型、碧玉製石釧などが出土した芝ヶ本遺跡（前～後期）がある。平安時代から室町時代の遺構、遺物は北東域で中久世遺跡、戌亥遺跡、南東域の久我殿遺跡が存在し、室町時代には北部域に下久世城、大蔵城、築山城、南西に東土川城が築かれる。



図1 調査位置図（条坊入り）

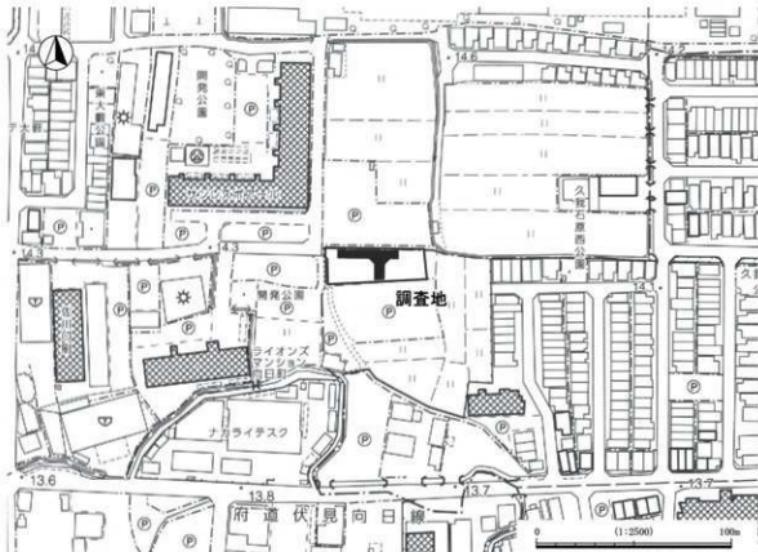


図2 調査位置図

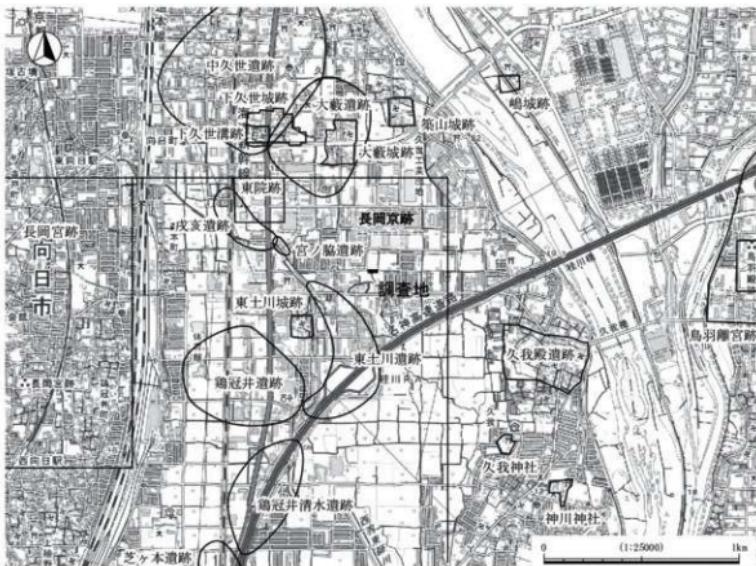


図3 周辺遺跡分布図

### 3. 調査経過

調査範囲は東西 35.0m、南北 17.0m の「T」字状を呈する。試掘調査結果にもとづき、耕作土を T.P.=11.4m まで機械掘削したのち人力掘削を行った。遺構は明黄褐色シルトの地山上面で検出し、中世、古代、弥生時代の遺構を同一面上で確認した。調査前、遺構検出、各時期の遺構完掘時に文化財保護課による随時検査、指導を受けた。また、学識経験者として近畿大学文芸学部文化・歴史学科教授 綱伸也氏により調査、指導をいただいた。

調査は平成 30 年 4 月 4 日から開始し、5 月 2 日に調査地の埋戻しを行い終了した。調査経過の月日等を記す。4 月 4 日（水）機械掘削を開始。文化財保護課検査。4 月 10 日（火）遺構検出。文化財保護課検査。4 月 12 日（木）中世遺構完掘。4 月 17 日（火）現場状況の確認のため文化財保護課検査。4 月 19 日（木）掘立柱建物掘削。文化財保護課検査、綱伸也氏指導。4 月 21 日（土）掘立柱建物完掘、方形周溝墓の掘削を開始。4 月 26 日（木）方形周溝墓掘削。綱伸也氏指導。4 月 27 日（金）文化財保護課検査。4 月 28 日（土）全ての遺構を完掘し、航空写真撮影。5 月 2 日（水）調査区を埋戻し調査を終了。（市田）

## II 遺構

### 1. 基本層序

第 1 層 現代耕作土 層厚 0.25m。

第 2 層 5Y6/4 オリーブ黄色粘質土で鉄分の沈着は少ない。調査区北端に残存する。層厚 0.1m。（以下の各層でも水平堆積である。）

第 3 層 10YR7/6 明黄褐色粘質シルト 細砂が少量混じる。鉄分の沈着多い。層厚 0.3m。地山。遺構検出面である。

第 4 層 10YR5/6 黄褐色粘質土 硬くしまる。上部の層界不明瞭。層厚 0.1 ~ 0.2m。

第 5 層 10YR5/8 黄褐色粘質土 層厚 0.1m。

第 6 層 10YR6/8 明黄褐色粘質土 細～中粒砂、細礫が混じる。層厚 0.1m。

第 7 層 10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土 細～中粒砂が多量に混じる。層厚 0.2 ~ 0.3m。

第 8 層 5BG5/1 青灰色シルト～中粒砂（砂層）上層との層界に起伏がみられる。

### 2. 遺構

遺構は中世の素掘り溝 12 条とピット 14 基、平安時代前期の掘立柱建物 2 棟と土坑 1 基、弥生時代中期の方形周溝墓 2 基とピット 1 基、その他時期不明の溝 1 条を検出した。以下概要を時代毎に記す。

#### 中世

溝 12 条とピット 14 基を検出した。

#### SD01 ~ 10, 13, 14

やや南西～北東方向に傾き延びる素掘り溝である。北から SD 01、SD 02・09・14、13、03、SD 08・07・05、SD 06 を検出した。以下煩雑なため SD を省略する。



溝は最大幅が約 0.45 ~ 0.55m 規模の 01、14、04、08 もあるが、ほぼ 0.3m の幅で延びる。03 は幅 0.83m と他のものに比べ幅がひろく、他の溝の状況から重複関係があると考えられた。東壁の断面で観察を行ったが、土壤化がすみ明確に確認されなかった。溝の深さはいずれも 0.1m 未満と浅く断面形は皿状を呈す。埋土は灰オリーブ色 (5Y6/2) 粘質シルトである。

01、02・09、03、04 は南北方向に 3.5m 程の間隔で平行に並び、重複関係をもつものもあることから、同位置で掘り返ししている状況がみられた。これらの溝はいわゆる鋤溝で耕作に伴うものと考えられる。埋土内からは土師器、須恵器、青磁、瓦器、瓦の細片が出土した。瓦器は 13 世紀代のものである。

10 は北西 - 南東に延び、東端が北東方向に曲がる溝を検出した。西側は削平される。幅約 0.34m、深さ 0.06m で埋土はにぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土で鉄分が多く沈着する。埋土内から混入したと思われる摩滅した弥生時代後期の弥生土器高杯脚部 1 点が出土した。

#### SP01 ~ 06、08 ~ 15

ピットは主に調査区西部で検出した。以下煩雑なため SP を省略する。

01、02、13 は、他と比べやや大きく 01 は長軸 0.36m、短軸 0.23m、深さ 0.14m の梢円形を呈す。02 は直径 0.36m、深さ 0.22m。13 は直径 0.3m、深さ 0.12m の円形を呈していた。

03 ~ 06、08 ~ 12、14、15 は直径 0.16 ~ 0.24m で、深さは約 0.1m と浅いものであった。埋土は単層で灰オリーブ色 (5Y6/2) 粘質シルトである。ピットに重複関係は認められなかった。埋土内から土師器の細片が出土した。

#### 古代

掘立柱建物 2 棟と土坑 1 基を検出した。

#### SB01

桁行 5 間・梁行 4 間の建物で東西方向に長辺をもち、南北 2 面の庇をもつ建物である。身舎柱間は 2.8m(約 9 尺)、庇の出は 3.1m(約 10 尺) である。身舎の掘方は方形で、1 辺が約 0.9 ~ 1.0m(約 3 尺) である。深さは、約 0.4m 以下(約 1 尺) であるが、身舎北西隅 SB01-11 は 0.44m、北東隅 SB01-16 は深さ 0.52m と深く、SB01-14 は 0.24m と他に比べ浅い状況がみられた。SB01-14 の掘方が浅い原因には、底面に広がっていた下層から隆起した礫が起因すると思われる。建物廃絶後に起こった礫の隆起により、本来の掘方が確認出来なかつたのか、礫があるため掘削出来なかつた可能性が考えられる。柱穴の埋土は褐灰色 (10Y6/1) 粘質土、黄褐色 (10YR5/6) 粘質土、青灰色 (5BG5/1) 粘土、暗灰色 (10BG4/1) 粘土に大きく分けられる。北庇の掘方は方形で 1 辺が約 0.56 ~ 0.65m、深さは約 0.4 ~ 0.5m である。埋土は褐灰色 (10Y6/1) 粘質土、青灰色 (10BG5/1) 粘土、暗青灰色 (10BG4/1) 粘土に分かれる。南庇の掘方は方形で 1 辺が約 0.5 ~ 0.6m、深さはいずれも約 0.2m である。埋土は褐灰色 (10Y6/1) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘質土に分かれる。これらの検出した柱痕は直径約 0.2m であった。断面状況から抜き取られたと考えられる柱穴は、身舎北西隅 SB01-11 と SB01-14 であった。

SB01-11 の抜き取り穴からはほぼ完形で口縁部の一端が打ち欠かれた瓶子が出土した。廃絶時に

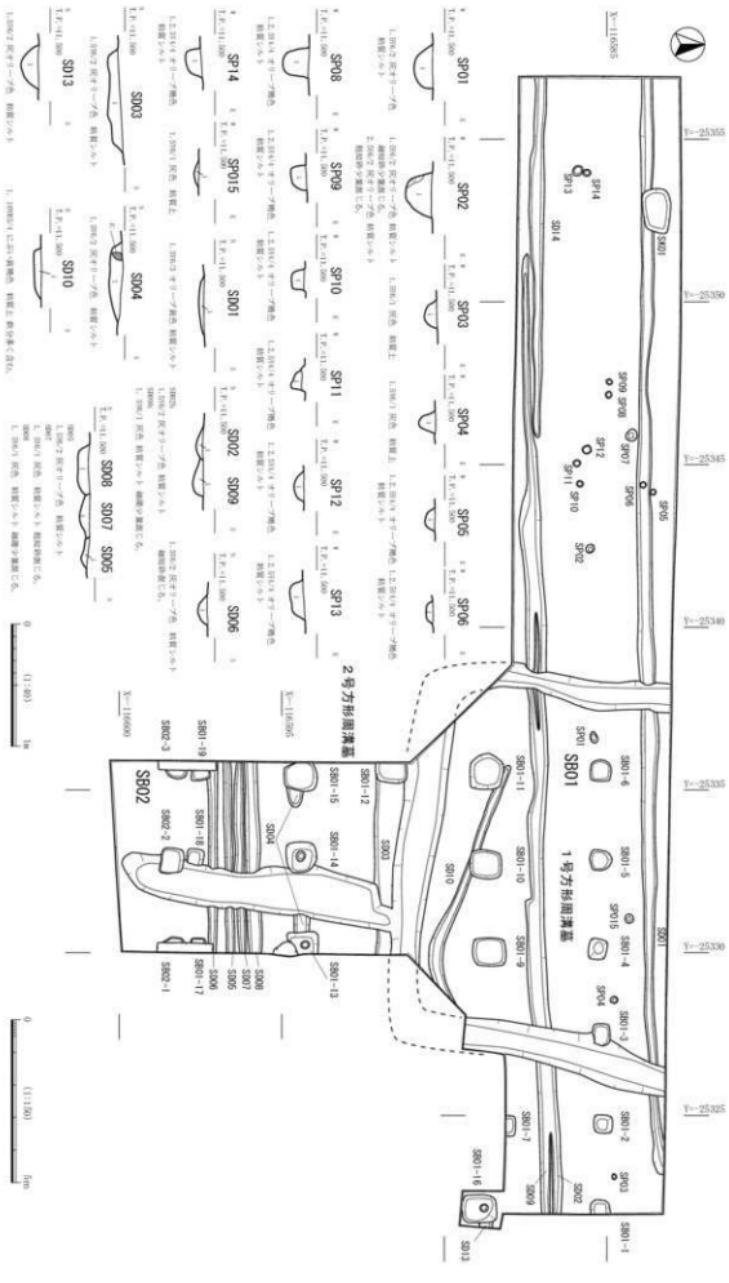


図5 遺構平面図、中世遺構断面図

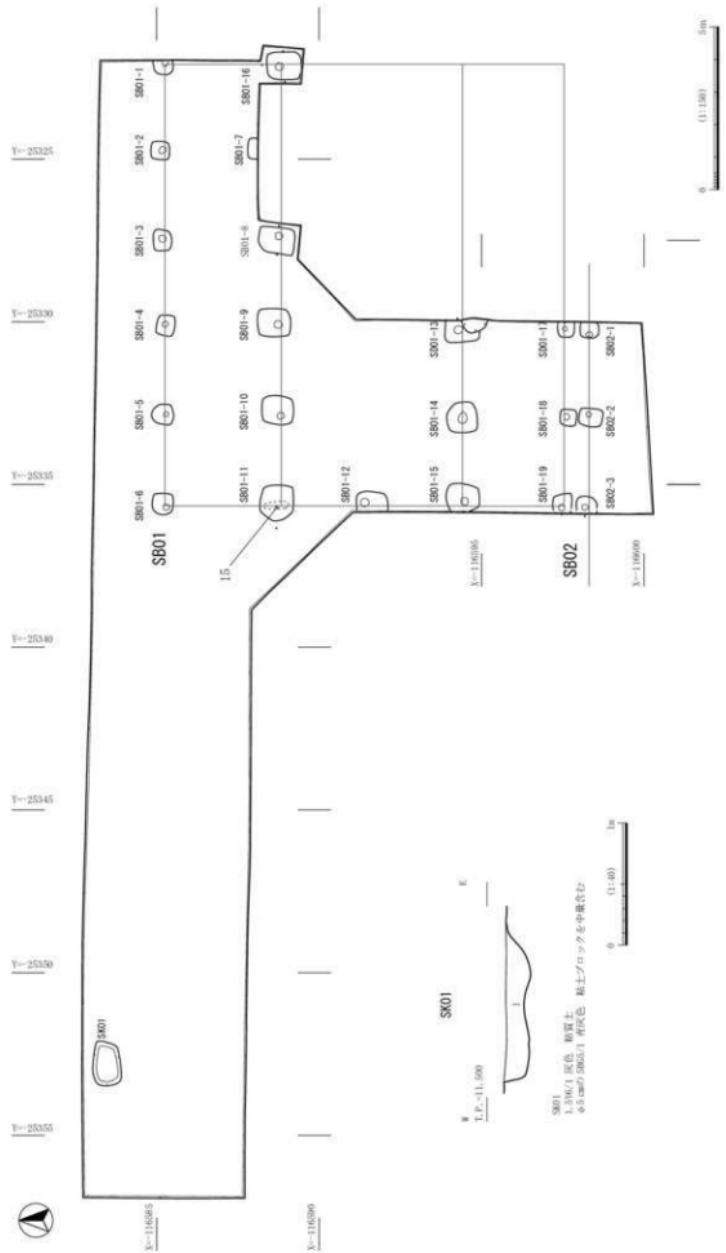
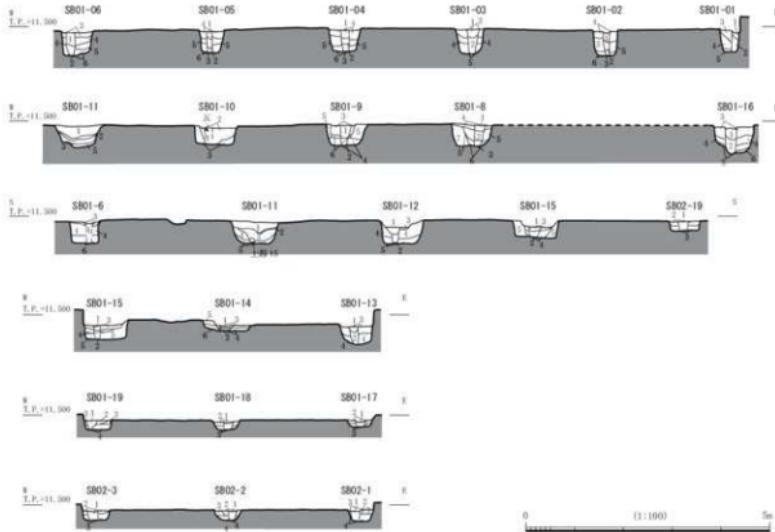


圖 6 古代遺構平面圖、SK01 斷面圖



SB01 · 02 土色一覽

SOMMER



SB01-15



図7 SB01 断面図

埋納されたものと思われる。

SB01 の時期は出土した遺物と、建物の構造が身舎柱間 9 尺に対して庇の出が 10 尺と広庇であることから平安時代前期の所産であると考えられる。

遺物は柱穴内から土師器、須恵器、瓦の細片の他、混入品の石鐵 1 点が出土した。

#### SB02

SB01 の南庇の柱列の南に隣接して並ぶ柱列である。掘方は方形で 1 辺が約 0.6 ~ 0.7m、深さはいずれも約 0.2 ~ 0.24m である。埋土は褐色 (10Y6/1) 粘質土、にぶい黄橙色 (10Y6/4) 粘質土に分かれる。当初、縁柱の建て替えによる可能性も考えたが、身舎から 3.8m (約 13 尺) 離れていること、縁柱としては規模が大きいことから別の建物が調査区南部へ展開するものと思われる。

調査終了後、遺構平面形の正誤を確認するため東西端の柱穴について断面を測定した。断面状況では鉄分の沈着、土壤化が著しく、明確にとらえることは困難であったが、埋土には堆積物のブロックなど人為的に埋め戻された痕跡を確認することが出来た。時期は柱穴列が SB01 と柱間がほぼ同じであることから平安時代前期の所産と思われる。

#### SK01

調査区西隅で検出された土坑である。長軸 1.33m、短軸 0.85m、深さ 0.16m の橢円形を呈す。埋土は灰色 (5Y6/1) 粘質土で直径 0.05m 大の灰色粘土ブロックが混じる。埋土内から、土師器、須恵器、縁柱陶器の細片が出土した。時期は SD01 と重複して切られ、埋土も他と異なることから長岡京期の可能性が考えられる。

#### 弥生時代中期

方形周溝墓 2 基とビット 1 基を検出した。方形周溝墓は畿内第ⅢからⅣ様式に属するものである。いずれも上部は削平され主体部は残っていなかった。

#### 1 号方形周溝墓

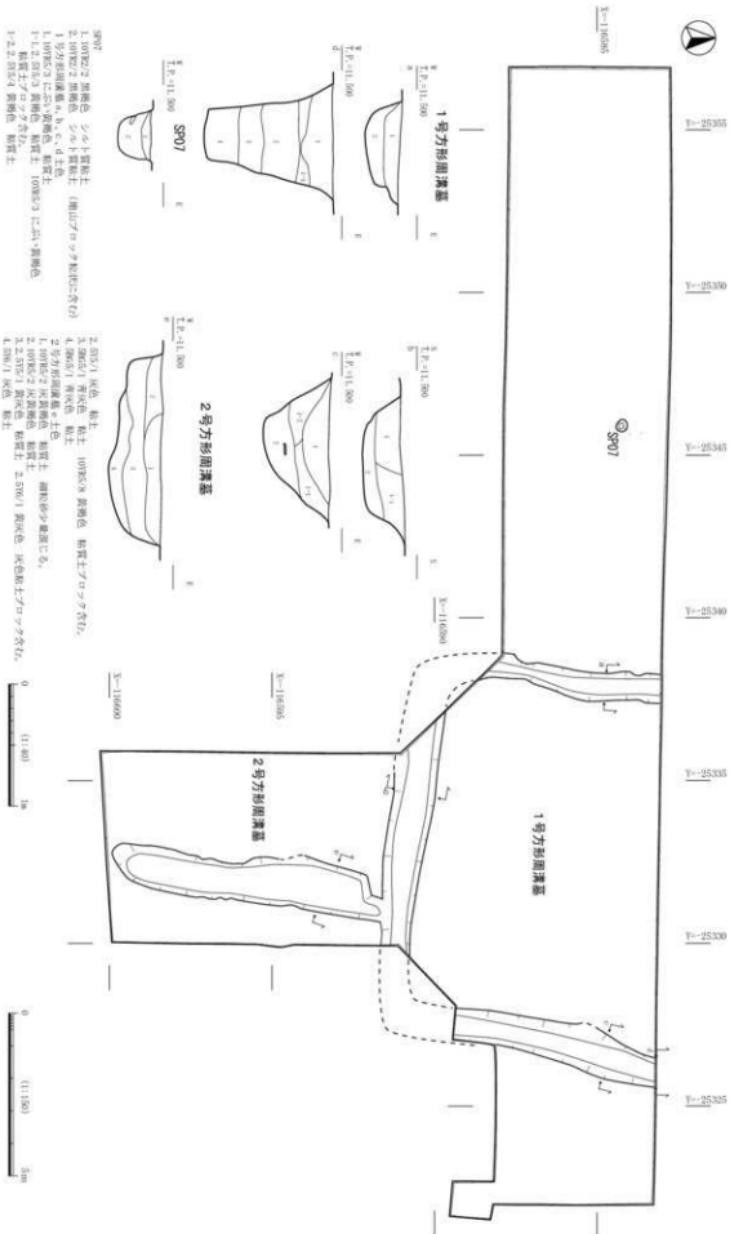
回状に周溝を検出した。北周溝は調査区外に延びる。長軸 10.0m、短軸 7.2m 以上で、南北方向の溝はやや東に傾く (N-10° -E)。周溝の規模は、東周溝は幅 0.9 ~ 1.2m、深さ 0.55 ~ 1.0m、西周溝は幅 0.78 ~ 0.9m、深さ 0.2 ~ 0.35m、南周溝は幅 0.87 ~ 1.25m、深さ 0.25 ~ 0.45m である。

埋土はにぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土と灰色 (5Y5/1) 粘土の 2 層に分かれる。

東周溝は、底面が南から北へ向かって 0.42m 下る。北端部分の埋土下部は灰色粘土と青灰色粘土が厚く堆積していた。この部分の周溝底部は他の周溝と異なり、地山の砂層（第 8 層）まで掘削されていた。また、供獻土器が周溝の上層と下層で出土したことから、東周溝では 2 度の祭祀が行われたことが



図 8 噴砂検出状況



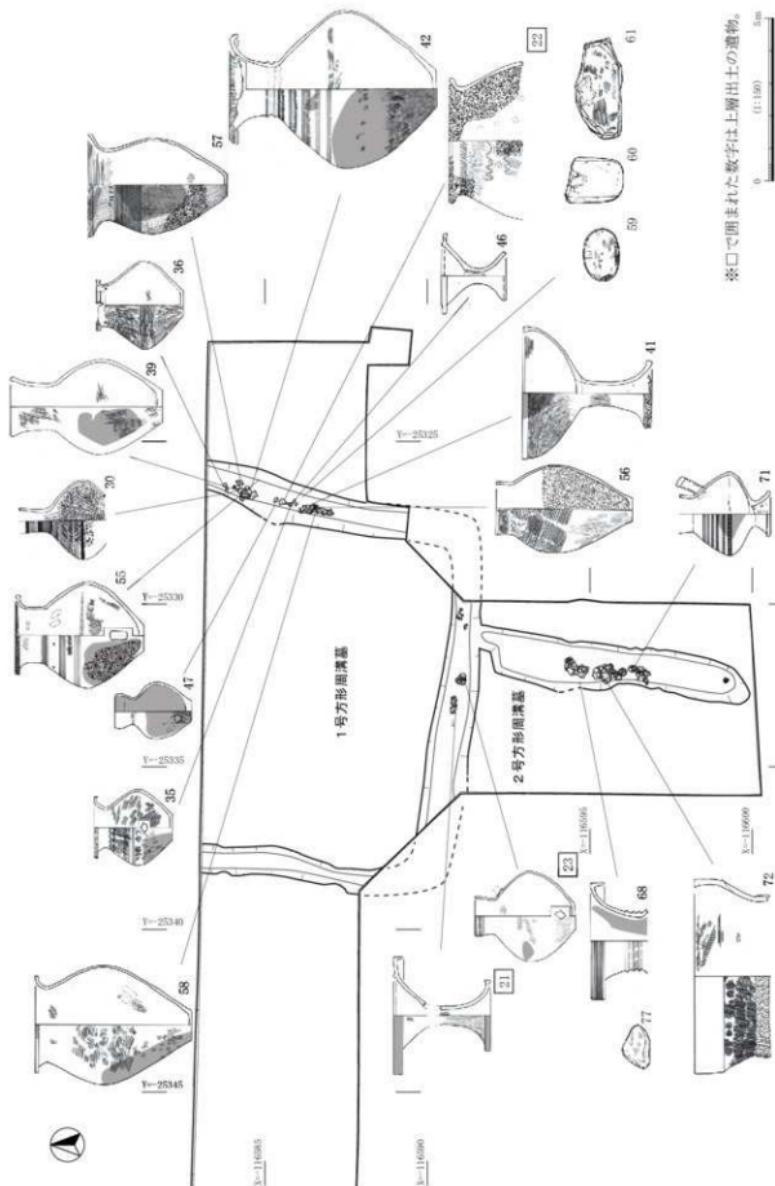


図 10-1・2号方形周溝墓主要供獻土器出土位置図

確認できた。

周溝内から出土した遺物の位置は、上層内の遺物は東・南周溝ともに中央付近で認められた。南周溝内で高杯と水差形土器、壺、東周溝では甕などが出土地した。下層の遺物は東周溝の中央から北部で出土した。中央では高杯や小型の壺、石器、北部では壺が多く認められる。

出土遺物は、体部下半に焼成後に穿孔を施したものや口縁部の一端を打ち欠いた土器や石包丁未成品転用石器、太型蛤刃石斧、砥石などのほか、供獻土器周辺の土を洗浄した結果ウリ類の種子2点を確認した。（遺物の出土位置については、図10参照）

## 2号方形周溝墓

南北方向の周溝の1辺を検出した。他の辺の周溝は調査区外に位置するため、検出した周溝は東・西辺のいづれにあたるかは不明である。検出した周溝の長さから1辺は約8.5m以上の方形周溝墓で、1号とほぼ同方向に主軸が東に傾く（N-3°-E）。周溝の幅は1.28～1.52mで深さは0.22～0.35mである。南側は削平により検出できなかったため、当時の地表面が南から北に向かって傾斜していたと考えられる。埋土は上層から灰黄色（10YR5/2）粘質土、灰黃褐色（2.5Y5/1）粘質土で灰色粘土ブロックが混じる、灰色（5Y6/1）粘土の3層に分かれる。遺物は周溝中央にかたまっていた。大型の壺2点と水差形土器などがある。検出状況から2号方形周溝墓は1号の周溝を共有して築造されたと考えられる。

1、2号方形周溝墓から出土した土器の色調は、乳白色、黄褐色のものが多くみられた。また、1号東周溝の遺物は良好な遺存状況で慎重に取り上げを行ったが、体部が大きく破損しているもののがいくつか認められ、体部本体を打ち欠いて供獻された可能性も考えられる。

## SP07

調査区西部で検出した。直径0.38m、深さ0.28m。埋土は黒褐色（10Y2/2）シルト質粘土で埋土内から弥生土器の細片が出土した。時期は弥生時代の周溝墓との関係から、同時期の可能性が高い。

## 墳砂

1号方形周溝墓の南周溝の西壁断面で墳砂が確認された。この墳砂は、周溝の下層が堆積したのちに起こり上層で途切れることから、弥生時代中期後半に起こったと考えられる。（市田）

### III 遺物

中世の溝内から土師器、須恵器、瓦器の細片、柱穴内から土師器、須恵器、瓦、石鐵。弥生時代中期の方形周溝墓周溝内から弥生土器、砥石、大型蛤刃石斧、石包丁未成品転用石器、砥石などが出土した。土器は堆積していた土壤により器表が剥離し調整が不明瞭なものが多くみられた。出土遺物量はコンテナ 10 箱分である。内、中世と古代の遺物は 1 箱弱、弥生時代の遺物は 9 箱であった。

#### 中世遺構(素掘り溝)出土遺物

##### SD02

**須恵器捏鉢** 1 は口径 21.0cm を測る。口縁部の外反は弱く、端部を上下に拡張している。色調は灰白色 (N7/) である。2 は東播系須恵器で、口径 22.0cm を測る。口縁端部の拡張は明瞭ではない。色調は灰白色 (N7/) である。2 点とも鎌倉時代に属す。

##### SD03

**土師器皿** 5 の器高は低く、口縁部付近では 0.2cm 程度の厚みであるのに対して、体部から底部までが 0.7cm 程度の厚みをもつ。口径 6.2cm、底径 4.6cm、器高 0.8cm を測る。内外ともにナデ調整で仕上げられる。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3) である。鎌倉時代に属す。

**瓦器椀** 6 は内外ともに風化のため暗文・調整は不明瞭である。口縁端部内外面に面を持ち、沈線が認められないことなどから、「和泉型」である。口径 10.2cm。色調は暗灰色 (N3/) である。鎌倉時代に属す。

**青磁碗** 4 は龍泉窯系青磁碗の口縁部の破片である。口縁部内面は肥厚する。釉はオリーブ灰色 (10Y5/2) を呈する。精緻な胎土である。

##### SD02・03

**須恵器壺** 3・7 は壺の底部である。3 は底部外面に回転糸切りが認められ、底径 7.4cm を測る。内外面ともにナデで仕上げられる。色調は灰白色 (N7/) である。7 は底面をナデによる調整を行つた後に高台を貼り付けたもので、底径 3.8 cm を測る。内外ともに回転ナデによる調整がなされている。色調はオリーブ灰色 (10Y5/2) である。いずれも長岡京期から平安時代前期に属す。

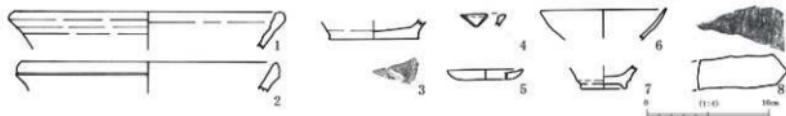


図 11 中世遺構出土遺物実測図

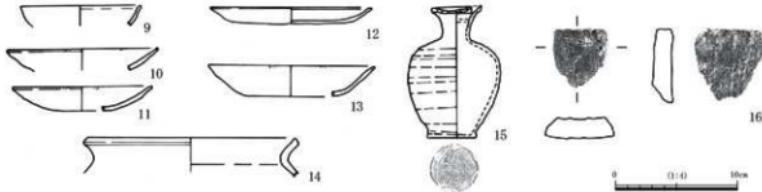


図 12 古代遺構出土遺物実測図

## SD07

瓦 8は平瓦の破片で厚さ2.6cm。凹・凸面は風化し、側面はヘラ切りを行う。色調は灰色(N6/)である。古代に属す。

## SD10

高杯 18は器表が風化した脚部である。脚部は中空で外面の上(5条)下(8条)2段に擬回線文を施す。色調は淡橙色(5YR8/4)である。畿内第V様式に属す。(江崎)

### 古代遺構(掘立柱建物)柱穴出土遺物

#### SB01-5

土師器碗 9は口径12.2cmを測り、厚さは口縁部付近で0.2cm程度と薄手である。ヨコナデ調整により口縁端部外面には面をもち、口底部の境までわずかに外反する。体部はユビオサエのちナデで仕上げる。口縁部には煤が付着する。柱穴より出土した。

土師器杯 10は口径11.4cm、残存高2.0cmを測る。口縁部はヨコナデにより外反する。口縁部の一部に煤が付着する。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。掘方より出土した。

土師器皿 13は口径13.6cm、器高2.5cmを測る。口縁部はヨコナデにより外反し、端部外面には面をもつ。口縁部には煤が付着する。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。掘方より出土した。

#### SB01-10

瓦 16は平瓦の破片で厚さ1.6cmを測る。凹面には布目が認められる。凸面は風化のため不明瞭で、ケズリによる調整かと考えられる。端面はヘラ切りの後ナデを施す。色調は暗灰色(N3/)である。柱穴より出土した。

#### SB01-3

土師器皿 11は口径8.1cmを測る。口縁部はやや外反し、端部内面はヨコナデにより角ばっておわる。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。掘方より出土した。

#### SB01-11

土師器皿 12は口径13.2cm、器高2.3cmを測る。口縁端部は内面に肥厚する。色調は浅黄橙色(10YR8/4)である。

須恵器瓶子 15は抜き取り穴から出土した。口径4.0cm、底径3.95cm、器高10.8cmを測る。内外ともに回転ナデによる調整が行われ、底部外面は糸切痕が認められる。口縁部の一端が意図的に打ち欠かれている。色調は明青灰色(5PB7/1)である。

#### SB01-14

土師器甕 14は甕の口縁部である。口径は17.1cmを測る。頸部から「く」の字に外反し上方にわずかに肥厚する。

石器 17は凹基式石器である。長軸3.2cm、短軸1.5cm、厚さ0.4cm、重量1g

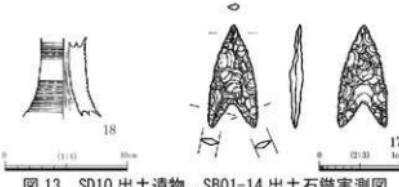


図13 SD10出土遺物、SB01-14出土石器実測図

を測る。やや大きめの形態から弥生時代前期に属すと思われる。混入品である。

出土した土器は平安時代前期に属す。(江崎)

#### 弥生時代(方形周溝墓)出土遺物

方形周溝墓に供献された土器群である。細片を含めて生駒山西麓産のものは認められなかった。

##### 1号方形周溝墓 上層・下層出土遺物

###### 上層出土遺物

壺 19は短頭壺で体部上半から下方に向かって緩やかに丸みをもつ。口縁部はやや内湾し、端部は上端に面をもち内側にわずかに肥厚する。体部上半に黒斑がのくる。色調は明黄褐色(10YR7/3)である。24は底部から緩やかに立ち上がる体部をもち外面には左上がりのタタキを施す。色調は明黄褐色(10YR7/3)である。接合は出来なかつたが、出土状況と胎土と焼成などからみて19と24は同一個体の可能性が高い。

20は広口壺である。体部上半は丸みをもち、口縁は外反して開き端部は下方へ拡張する。頭部は縱方向のハケメを施し、体部上半には波状文を巡らす。口縁端部付近に煤が付着する。色調は橙色(2.5YR6/8)である。

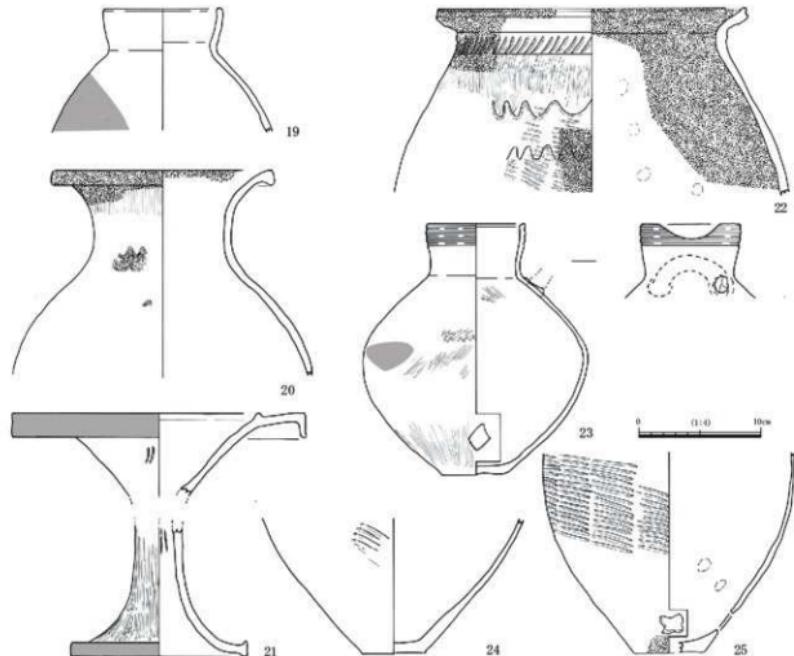


図14 1号方形周溝墓上層出土遺物実測図

**高杯** 21は垂下する口縁をもつ高杯である。脚据部は外方へ大きく開き端部は上下に拡張し面をもつ。杯部は外上方に延びる。口縁部と杯体部の境に突帯をもつ。杯部、脚部外面はヘラミガキを施す。口縁と据部端面に黒斑がのくる。色調は灰白色(2.5Y8/1)である。

**甌** 22は体部中位から上方になだらかに膨らみ口縁部は短く「く」の字状に外反する。口縁端部はつまみあげる。体部外面はタタキ、頸部外面は縦方向のハケメを施す。口縁部内面はヘラケズリ、体部内面には指頭圧痕がのくる。口縁端部に凹線文、頸部に列点文、体部には1条2単位の波状文を巡らす。口縁から体部内面にかけて煤が付着する。他地域から影響をうけたものと考えられる。色調は明赤褐色(2.5YR5/6)である。25は底部から緩やかに立ち上がる体部をもち外面には左上がりのタタキを施す。体部下半に焼成後1箇所穿孔する。色調は橙色(5YR7/8)である。

**水差形土器** 23は算盤玉形の体部に直立する頸部から緩やかに内湾する口縁がつく。口縁端部はやや内傾し面をもつ。体部下半の外面は縦方向のハケメ、上半部外面は細かい右上がりのハケメを施す。口縁部外面に3条の凹線文と体部上半に波状文を巡らす。体部中ほどに黒斑がのくる。体部下半に焼成後に穿たれた孔が1箇所認められる。取手側の口縁部は弧状に窪む。色調は灰白色(5Y8/2)である。

#### 下層出土遺物

**壺** 26・32・33・35～37・42・55は広口壺である。26の口縁部は頸部から直線的に開き短く外反する。端部は面をもつ。色調は橙色(7.5YR7/6)である。32は頸部から屈曲して開く口縁部をもち端部はわずかに上下に拡張する。外面はハケメ調整後に縦方向のヘラミガキを施す。色調は浅黄橙色(10YR8/3)である。33は直立気味の短い頸部から短く外反する口縁をもち、端部は面をもつ。口縁部内外に横方向のハケメがのくる。色調は橙色(7.5YR6/6)である。37は頸部から口縁部にかけて強く屈曲し開く。口縁端部はわずかに上下に拡張し面をもつ。頸部外面は右上がりのハケメを施す。色調は浅黄橙色(10YR8/4)である。42は大型の広口壺で体部中位が強く張る。頸部は直線的に外方に傾き、口縁部は大きく外方へ開く。口縁端部は垂下する。体部外面下半に縦方向、内面に横方向のハケメがのくる。体部上半は直線文と波状文を交互に巡らし、頸部下部には簾状文を施す。頸部には2条の突帯を貼り付ける。口縁部外面は、列点文を施したのち、円形浮文を貼り付ける。口縁内面は2列の列点文と2個1対の円形浮文を貼り付ける。体部下半に黒斑がのくる。色調は灰白色(10YR8/2)である。55の体部は算盤玉形で上方に立ち上がる頸部との境は明瞭である。口縁部は強く外反し、端部は上下に拡張する。著しく摩滅し、調整は不明瞭であるが、内外面に縦方向のハケメがのくる。体部外面に直線文3単位の間に波状文を巡らし、口縁端部と内面は波状文で飾る。底部下半外面には黒斑と煤がのくる。底部よりやや上方に焼成後長方形の穿孔を施す。色調は浅黄橙色(7.5YR8/6)である。35・36の体部は算盤玉形を呈する。35は強く外反する口縁部をもつ。端部は上下にわずかに拡張し、外面に刻目を施す。体部内面は左上がりのハケメ、体部外面は縦方向のハケメを施し、下半部はナデて仕上げる。文様は体部上半に直線文と波状文を交互に巡らす。体部中位よりやや下に焼成後、穿孔を1箇所施す。体部下半には黒斑がのくる。色調はぶい黄橙色(10YR7/2)である。36は体部中位が強く張る。口縁部は短く外湾し端部は上下に拡張する。

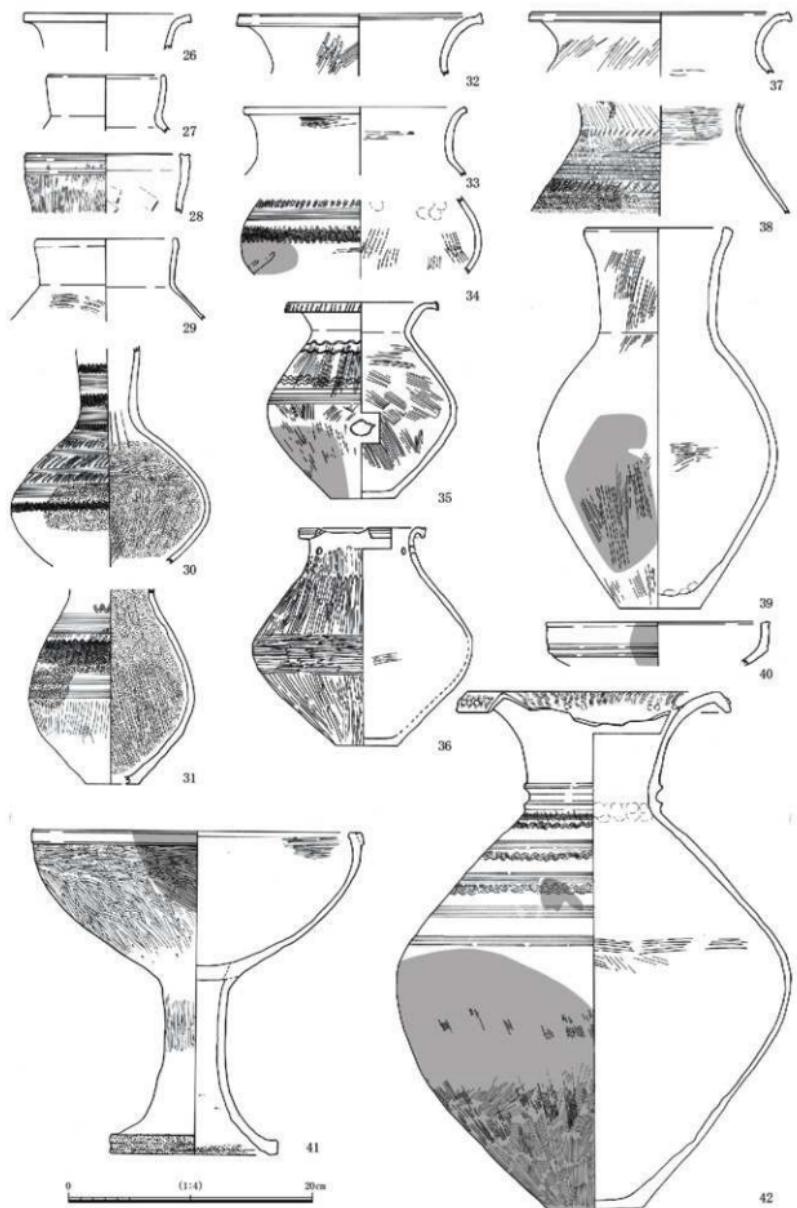


図 15 1号方形周溝墓下層出土遺物実測図(1)

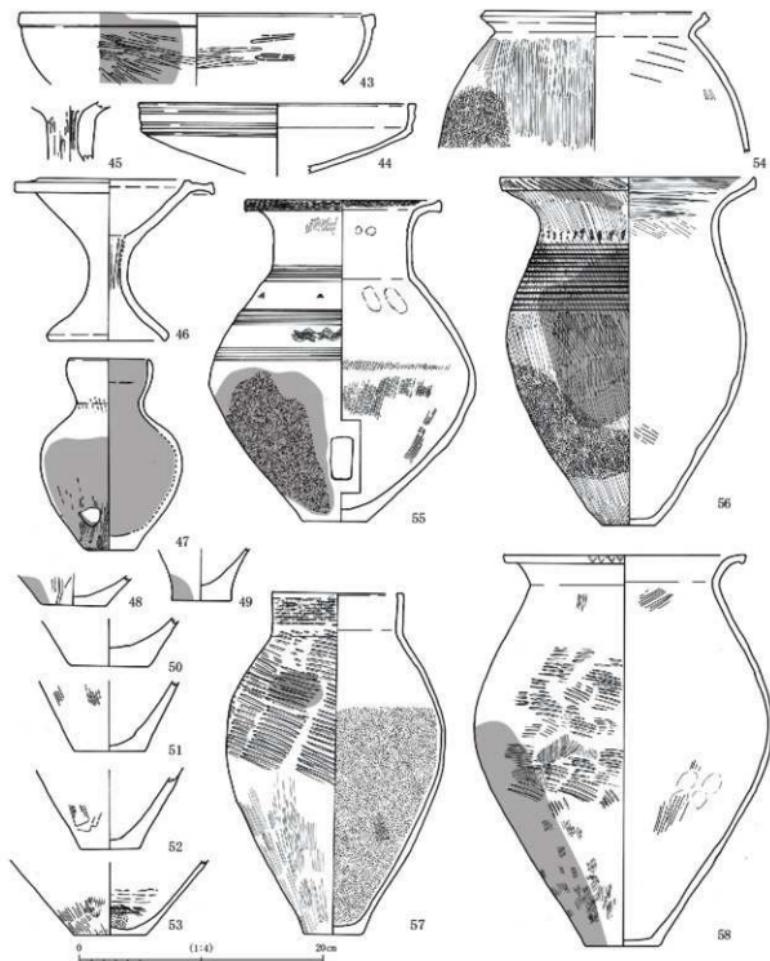


図 16 1号方形周溝墓下層出土遺物実測図（2）

端面には2条の凹線文を巡らす。体部外面は縦方向のヘラミガキの中位には横方向のヘラミガキを施す。内面はハケメがのこる。頸部に2箇所に紐孔が認められる。口縁部の一端が打ち欠かれる。色調は灰白色（10YR8/2）である。

27・29・57は短頸壺である。27は直立し内湾する口縁をもち端部上端は面をもつ。色調は黄橙色（10YR7/8）である。29は体部外面に左上がりのタタキを施す。色調は橙色（7.5YR7/6）である。57は底部から急角度で上方に延び、最大径を体部上半にもつ。直立する頸部からつづく口縁端部

は内傾する。体部外面下半部は縦方向のハケメ、上半部は左上がりのタタキ、口縁部は横方向のタタキ後縦方向にハケメを施す。口縁端部はヨコナデの痕が明瞭に残る。ハケメがのこる。体部外面上半の一部に黒斑、内面全体に煤が付着する。色調は橙色 (7.5YR7/6) である。

28・39は長頸壺である。28は内湾する口縁をもつ。口縁端部上面に凹線文と口縁部外面は縦方向のハケメ調整後、2条の凹線を巡らす。口縁内面は左上がり方向の板ナデで仕上げる。色調は灰白色 (2.5Y8/2) である。39は体部中位に最大径をもつ。頸部はやや外傾し、口縁はわずかに屈曲し立ち上がり、上端に面をもつ。体部下半外面は左上がり、頸部外面は右上がり、体部内面にはハケメを施す。体部中位には黒斑がのこる。

30は細頸壺で体部はしもぶくれで体部下半に最大径をもつ。頸部から口縁部は直立し、口縁部はやや内湾する。体部内面下半は縦方向の粗いハケメ、上半は横方向のハケメを施す。体部下半から上方にかけて波状文、直線文と列点文を交互に巡らし、頸部は波状文と直線文を施す。体部内外面に煤が付着する。色調は浅黄色 (2.5Y8/3) である。

31は壺の底部から体部で、体部下半に弱い張りをもつ。体部内外面は縦方向の粗いハケメを施す。直線文と波状文を巡らす。内外面に煤が付着する。色調は灰白色 (2.5Y8/2) である。34は壺の体部で体部下半に最大径をもつものである。体部外面は右上がりのヘラミガキ、内面は縦方向の粗いハケメを施す。体部外面なかほどから上方に波状文、直線文、列点文を順に巡らす。外面に黒斑がのこる。色調は灰白色 (10YR8/2) である。38は壺の体部上半から頸部で、外面は左上がりのハケメを施し、頸部内面は横方向のハケメ、体部内面はナデで仕上げる。外面には他と比べ間隔の広い直線文と列点文を交互に巡らす。外面に煤が付着する。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/2) である。

47は小型の壺で肩に張りをもつ。頸部から口縁にかけては内湾し端部は丸く收める。体部外面にヘラミガキを施し、体部下半に焼成後の穿孔が1箇所のこる。体部から底部外面には黒斑がのこる。色調は灰白～浅黃橙色 (2.5Y8/2～7.5YR8/3) である。48は壺の底部から体部で、外面にはハケメを施し、黒斑がのこる。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) である。

**高杯** 40・44は杯部から内湾気味に立ち上がる口縁をもつ。口縁端部は面をもつ。40は杯部と口縁部の境界に凹線文2条を巡らす。外面には黒斑がのこる。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/4) である。44は摩滅し調整は不明。外面に凹線文3条が巡る。色調はにぶい黄褐色 (7.5YR6/3) である。41・43は大型の高杯で杯部は椀状を呈する。口縁は内湾し、口縁端部は上面に面をもち、外面に突帯を貼り付ける。41の裾部は「ハ」の字状に開き端部はヨコナデにより面をもつ。脚部は中空で椀状の杯部へ続く。外面は上方にヘラケズリしたのちヘラミガキを施す。口縁部内面は横方向のヘラミガキ、裾部内面は横方向のヘラケズリがのこる。裾部の内外面に煤が付着する。杯部と脚部の境に円盤充填を行う。色調は灰白色 (10YR8/2) である。43は杯部から口縁部が残る。内外面横方向のヘラミガキを施す。外面に黒斑がのこる。色調は灰白色 (10YR8/2) である。45は高杯の脚部である。外面は縦方向のヘラミガキを施す。色調は灰白色 (10YR8/2) である。46は水平口縁の高杯である。「ハ」の字状に広がる裾部から短く延びる脚部につながる。杯部は直線的に開き水平口縁の端部はわずかに上下に拡張する。口縁内側に突帯を貼り付ける。色調は橙色 (5Y6/6) である。

**甕** 49・50～53は底部から体部である。49の底部は厚みをもち上方に立ち上がったのち聞く。色調は橙色(7.5YR6/6)である。50～53は底部から体部へ直線的に聞く。いずれも摩滅し調整は不明瞭である。51～53の外面にはハケメがのこる。50の色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)である。51の色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)である。52の色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。53の内面は横方向のハケメを施す。煤が付着する。色調は灰白色(10YR8/2)である。

54は体部上半部に最大径を有し、「く」字状に曲がる甕で、口縁端部は上方に拡張し、端面は内側に傾斜する。体部外面には縦方向に粗いハケメ、内面は左上がりの板ナデとハケメが明瞭に残る。体部外面に煤が付着する。色調は灰黄色(2.5Y7/2)である。

56は近江系の受口状口縁甕である。体部の張りは弱く器壁が薄い。口縁は強く外反し口縁端部は短く上方に立ち上がる。体部外面は縦方向、頸部から口縁端部にかけては左上がりの粗いハケメを施す。体部内面はハケメを施した後ナデ調整し、口縁部内面は横方向のハケメで仕上げる。装飾は体部上半に7条の直線文と頸部に上下2孔1単位の刺突文を巡らす。体部中ほどから上半と口縁部に黒斑がのこり、体部下半部には煤が付着する。色調は浅黄橙色(10YR8/3)である。

58は体部中位にやや張りをもち、頸部に向かって直線的に延びる。口縁部は外反し端部で屈曲する。口縁端部は面をもち外面に連続する「V」字状の刻目を巡らす。体部外面は、左上がりのタタキ後縦方向のハケメ、体部下半と頸部はハケメ後ナデで仕上げる。内面はハケメがのこる。体部下半に黒斑がのこる。色調は浅黄橙色(7.5YR8/6)である。

供献された弥生土器は46など古い様相を残すものもみられるが、簾状文及び回線文が認められることなどから、畿内第IIIからIV様式に属する。

**石器** 59は石包丁未成品転用石器である。長軸8.0cm、短軸5.5cm、厚さ0.8cm、重量67gを測る。板状の緑泥片岩を楕円盤状に加工する。両平面の中央部に二孔一対の穿孔が施されるが未貫通である。短径方向の対極する2辺の側縁部には敲打による潰れが見られる。石包丁の未成品もしくは再加工品と思われる。60は太型蛤刃石斧である。長軸8.9cm、短軸7.0cm、厚さ5.0cm、重量434gを測る。石材は片麻岩である。柄に装着する部分を欠損する。欠損部は敲打によりなだらかに加工され、再利用を意図したものと思われる。61は砥石である。砂岩を方柱状に加工したもので、4面の砥面をもつ。長軸15.6cm、短軸7.5cm、厚さ4.6cm、重量737gを測る。(影山)

## 2号方形周溝墓出土遺物

**壺** 62・65・67・68・72・73は広口壺の口縁で、外方へ強く屈曲する口縁にやや上下に拡張する口縁部がつく。62は外面に縦方向の粗いハケメが明瞭にのこる。色調はにぶい橙色(5YR7/4)である。65は水平に近く広がる口縁をもち端部は肥厚する。色調はにぶい黄橙色(7.5YR7/4)である。67は外面に縦方向のハケメを施す。口縁部内面には列点文を巡らす。色調は淡黄色(2.5Y8/3)である。68は頸部から口縁部にかけて強く外反し、口縁端部は垂下する。頸部には断面三角形状の突帯が3条施され、垂下した口縁の外面には回線文5条を巡らす。色調は灰白色(10YR8/2)である。

72是有段口縁の大型壺である。外反する頸部から垂直に立ち上がる口縁部がつく。端部は面をもち内側にわずかに拡張する。外面は右上方向への細かいハケメ、内面は横方向のハケメを施す。

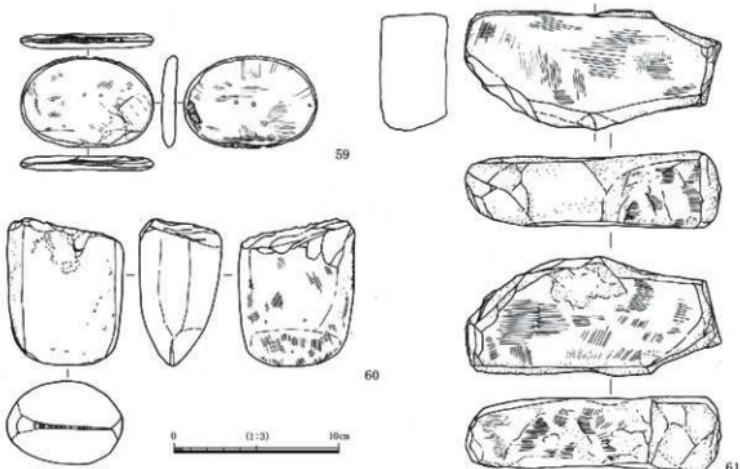


図17 1号方形周溝墓下層出土石器実測図

頭部下半には太い粘土帯を貼りつけ、上下2段に工具により連続した圧痕を施す。色調は灰白色(10YR8/2)である。73の口縁は強く外反し端部はわずかに上下に拡張する。端面には刻目を巡らす。色調は浅黄橙色(7.5YR8/4)である。

63・64・69は短頭壺である。63は直立する口縁をもち、口縁端部は面をもつ。外面は縦方向のハケメを施し、端部にはヨコナデの痕が明瞭に残る。色調は灰白色(10YR8/1)である。64は体部上半から口縁部が残存する。口縁部は外傾し、端部は屈曲し立ち上がる。体部外面上半は横方向のタタキを施す。色調は灰白色(7.5YR8/2)である。69はわずかに外形する口縁部をもつ。口縁端部は内傾し面をもつ。体部から頭部にかけて縦方向の粗いハケメが施され、口縁端部はヨコナデし仕上げる。色調は灰白色(2.5Y8/2)である。

76は底部に焼成後の円形の穿孔を行う。色調は灰白色(2.5Y8/2)である。

**水差形土器** 66は直立する頭部にわずかに湾曲する口縁部がつく。口縁端部は丸くおわる。口縁部外面に3条の回線文を施す。71は台付の水差形土器である。台の裾端部は短く上方に上がる。体部下半に強い張りをもち直立する頭部がつく。台部内面は横方向のヘラケズリを施す。体部外面上半に5条の直線文を巡らせ最下部の1条の上に円形浮文を配す。色調は灰白色(10YR8/2)である。

**高杯** 70は水平口縁をもち、口縁端部をわずかに拡張する。

**甕** 74は甕の体部上半から口縁部である。外反する口縁がつく。体部外面に左上がりのタタキがのこる。色調は灰白色(10YR8/2)である。75は底部からやや開き直線的に延びる体部をもつ。色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)である。

**石器** 77は用途不明石製品である。長軸6.6cm、短軸4.2cm、厚さ0.7cm、重量27gを測る。水成岩である。板状で、平面形は歪な三角形を呈する。両平面に擦過痕、側縁部に成形痕がみられる。

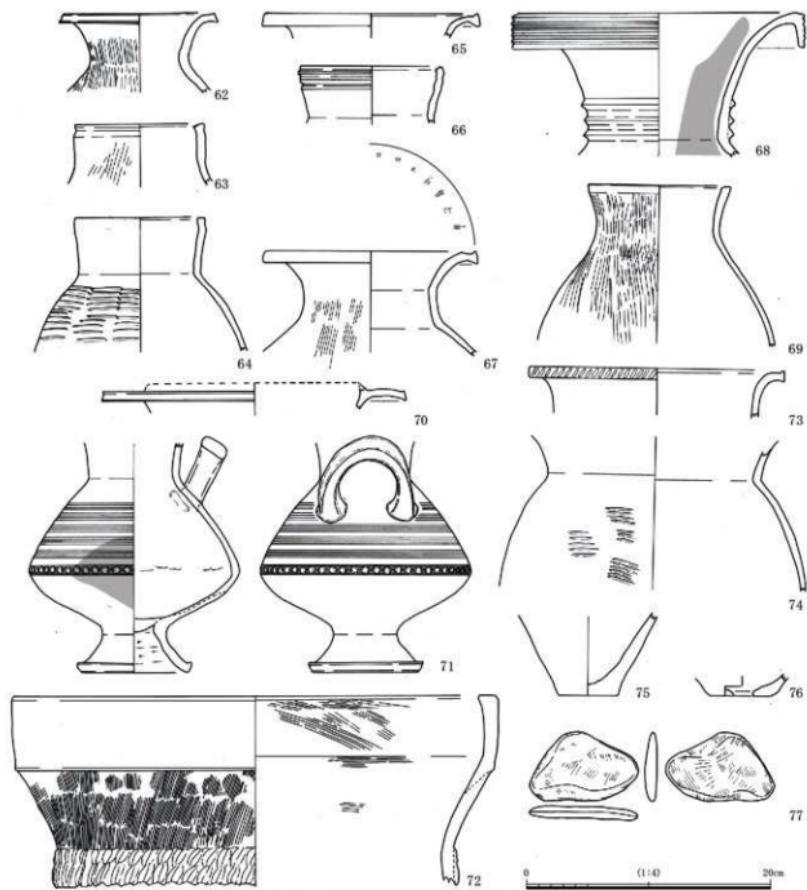


図 18 2号方形周溝墓出土遺物実測図

が、自然の小礫に加工を加えたものと思われる。(影山)

70など古い様相を呈するものもあるが、回線文の盛行が認められる土器が多いことから畿内第IV様式に属す。

#### 植物遺存体

東周溝内の供獻土器周辺の土を洗浄した結果、ウリ類の種子2点を確認した。(市田)

## IV.まとめ

今回の調査地は、長岡京左京一条四坊七町に位置する。長岡京城では北東隅近くにあたる。以下、遺構、遺物ともに検出していない縄文および古墳から奈良時代は割愛するが、今回の調査で明らかになった事柄を時代ごとに若干の考察を加えてまとめとする。

**中世以降** 溝とピットを検出し、遺構内から13世紀代の瓦器の細片など中世に属す少量の遺物が出土した。遺構の形状から鎌倉時代以降の耕作に伴う溝などと考えられる。

**長岡京期から平安時代** 長岡京期は、土坑1基を検出した以外の遺構は認められなかつた。平安京遷都後、出土遺物と身舎のプランからみて平安時代前期に建てられた掘立柱建物2棟を検出した。

SB01は東西方向に長辺をもつ桁行5間・梁行4間、南北2面に庇をもつ。身舎、柱穴の掘方平面形は、1辺3尺の正方形である。南側に隣接して検出したSB02は、柱穴列の一部を確認したにとどまり規模は不明である。両者は位置からみて同時並存していないことは確実である。どちらが先か明らかにし得ないが近似した時期に存在していた。

SB01の柱の抜き取り穴から埋納された状態で出土した口縁部の一端を打ち欠かれた須恵器瓶子は、建物廃絶時祭祀の一端をうかがう貴重な資料となろう。長岡京期には建物が存在していない間に平安京遷都後に建築されたこの建物群の性格については今後の周辺部の調査成果を待って検討される事を期待したい。

**弥生時代** 弥生時代中期後半の墳丘および主体部が削平された方形周溝墓2基と性格不明のピット1基を検出した。1号方形周溝墓は北辺を除く東・西・南辺の周溝を検出し、長軸10.0m、短軸7.2m以上の規模であることを確認した。2号方形周溝墓は、1号南周溝と周溝を共有する南北方向の1条を検出したのみで規模は不明である。検出状況と出土土器からみて築造順序は1号から2号周溝墓の順である。

1号方形周溝墓の東周溝では2回の墓前祭祀に伴い周溝内遺棄された畿内第IIIからIV様式に属す20個体以上の土器と折損した太型蛤刃石斧を含む数点の石器も含まれていた。2号方形周溝墓でも同様に墓前祭祀後に遺棄された畿内第IV様式に属す約10個体分の土器と不明石製品1点が出土した。周溝内から多量の土器と少量の石器が出土する例は多くない。当時の墓前祭祀を検討する上で良好な資料である。

また今回、出土した弥生土器は、南山城の中期後半の土器を知る上で重要な一括資料と考える。近江系の甕や北・西摂津地方の影響を受けた土器が見られる。生駒山西麓産の土器は小破片も含めて認められない。調査地周辺地域では、少なくとも弥生時代中期後半には中南河内地方の影響をほとんど受けていないことを示していると思われる。

方形周溝墓のあり様から見て、調査地に隣接して複数の方形周溝墓が存在することはほぼ間違いない。被葬者の居住域は現時点では明らかにできないが、この時代に通有の墓域と集落の位置関係から隣接する地域に存在が想定される。

前期の可能性が高い石鐵と後期（畿内第V様式）の弥生土器高杯の脚部が各1点、後世の遺構から混入品で出土しただけである。周辺遺跡からもたらされものであろう。（福永）



1. 調査区全景（北東上空から）



2. 1号方形周溝墓出土供獻土器



1. 調査区全景（南から）



2. 1・2号方形周溝墓全景（北東から）



1. 調査前全景  
( 北東から )



2. 基本層序  
( 南東から )



3. SD05 ~ 08 完掘  
( 南東から )



1. SB01 完掘  
( 西から )



2. SB01 完掘  
( 南西から )



3. SB01-2 完掘  
( 南から )



1. SB01-2 土層断面（北から）



2. SB01-3 土層断面（北から）



3. SB02-1 土層断面（南から）



4. SB02-2 土層断面（南から）



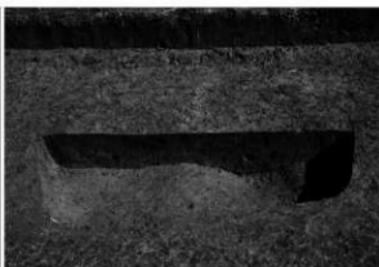
5. SB01-11 土層断面（北西から）



6. SB01-16 土層断面（北東から）



7. SB01-11 遺物出土状況（南西から）



8. SK01 土層断面（南から）



1. 1号方形周溝墓土層断面（南から）



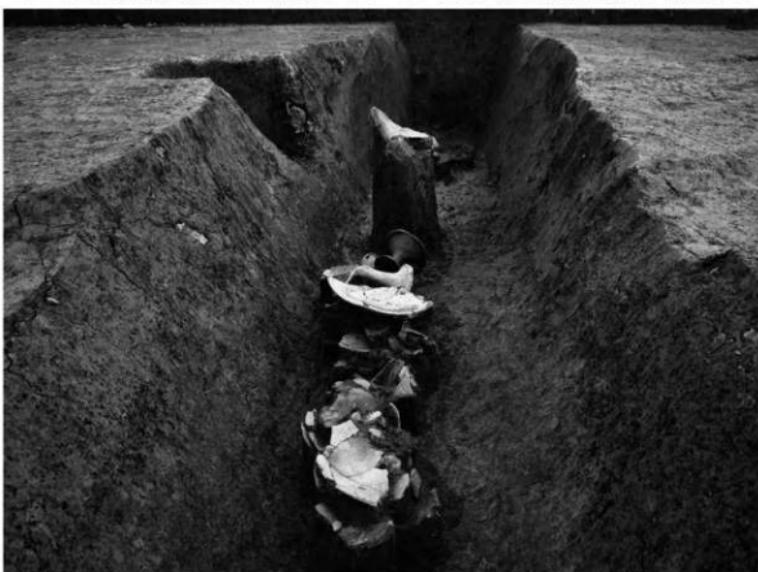
2. 1号方形周溝墓東周溝遺物出土（東から）



3. 1号方形周溝墓南周溝遺物出土（南西から）



4. 1号方形周溝墓東周溝遺物出土（北東から）



5. 1号方形周溝墓東周溝遺物出土（南から）



1. 2号方形周溝墓完掘（西から）



2. 2号方形周溝墓土層断面（南から）



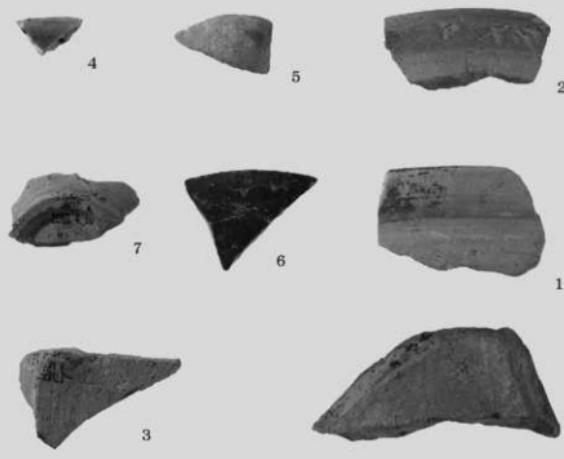
3. 2号方形周溝墓遺物出土状況（南東から）

4. 2号方形周溝墓遺物出土状況（南から）

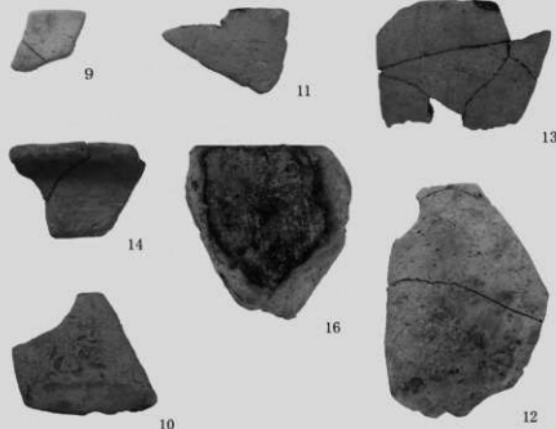
図版 8

遺物

素掘り溝出土遺物（中世）、SB  
01 出土遺物（平安時代）



須恵器捏鉢（1・2）・壺（3・7）・青磁碗（4）・土師器皿（5）・瓦器椀（6）・瓦（8）



土師器椀（9）・杯（10）・皿（11～13）・甕（14）・瓦（16）

図版9 遺物 SB01・1号方形周溝墓出土遺物



15



47



35



36



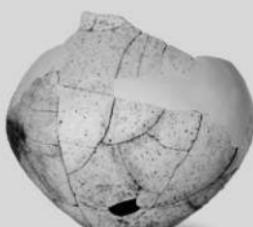
20



22



21



23

須恵器瓶子(15)、弥生土器壺(20・35・36・47)・甕(22)・高杯(21)・水差形土器(23)



46



56



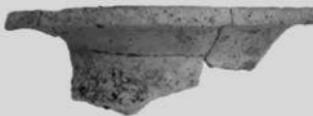
57



55



39



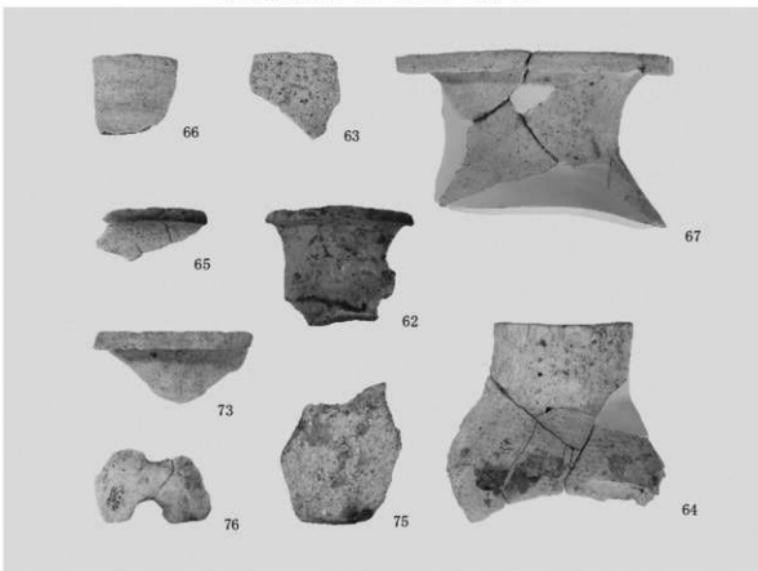
37

弥生土器壺 (37・39・55・57)・甕 (56)・高杯 (46)

図版 11 遺物  
1・2号方形周溝墓出土遺物



弥生土器壺 (42・69)・甕 (58)・高杯 (41)



弥生土器壺 (62～65・67・73・76)・甕 (75)・水差形土器 (66)

圖版 12  
遺物  
SB 01 - 14、  
1・2号方形周溝墓出土遺物



72



68



71



17



60



59



61



77

弥生土器壺 (68・72)・水差形土器 (71)、石鏃 (17)、石庖丁未成品転用石器 (59)、  
大型蛤刃石斧 (60)、砥石 (61)、用途不明石製品 (77)

## 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうさきょういちじょうよんぼうななちょうあと 600 じはくつちょうさほうこくしょ							
書名	長岡京左京一条四坊七町跡 600 次発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	福永信雄 影山美智与 市田英介 江崎周二郎							
編集機関	株式会社 地域文化財研究所							
所在地	〒 578 - 0941 大阪府東大阪市岩田町 1 丁目 17 番 9 号 TEL 072 - 968 - 7321							
発行年月日	平成 30 年 (2018) 12 月 28 日							
所収遺跡名	所轄	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長岡京左京 一条四坊七町跡	京都府伏見区 久我石原町 9-16。 南区久世大町町 560-1・32・33・ 615	26109 26107	3	34 度 94 分 87 秒	135 度 72 分 25 秒	平成 30 年 4 月 4 日～ 5 月 2 日	約 256 m <sup>2</sup>	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京左京 一条四坊七町跡	生産域	中世	ピット・溝	土師器、須恵器、瓦器、 瓦				
	都城跡	古代	土坑、 掘立柱建物	土師器、須恵器、瓦				
	墓域	弥生時代	方形周溝墓	弥生土器、石器				

### 長岡京左京一条四坊七町跡 600 次発掘調査報告書

平成 30 年 12 月 28 日発行

編集・発行 株式会社 地域文化財研究所  
 〒 578 - 0941 東大阪市岩田町 1 丁目 17 番 9 号  
 TEL 072 - 968 - 7321

印刷・製本 株式会社 地域文化財研究所